

第 10 回 WCRP / *RfP* 世界大会

リンダウ宣言へ向けた 日本からの提言

目次

大会テーマ P.1
3つのメッセージ P.1~2
提言 15 P.3~5

大会テーマ

慈しみの実践: 共通の未来のために——つながりあういのち Caring for Our Common Future—Advancing Shared Well-being

* 日本語訳の説明

「Caring for Our Common Future」では、「他者の痛みに関心を向けること」を意味する「Care」を、すべての宗教に共通する「慈しみ」とし、行動していく現在進行形「ing」を「実践」と表し、「慈しみの実践」とした。

「Well-being」は「幸せ」「福利」「福祉」という日本語訳にあたるが、「Shared」と形容していることによって、苦勞や苦惱の只中にある人たちと共にあり、世界全体が幸せになるには苦も分かち合うことであると理解する。幸せなことも辛いことも悲しいことも含む「いのち」がつながりあっているからこそ、苦しんで人を見過ごすことはできず、「いのち」をつなげていく行動そのものが「Advancing」であることから、メインテーマの和訳に合わせて「つながりあういのち」とした。

3つのメッセージ

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」

宮沢賢治 1926年「農民芸術概論綱要」

- 共につながりあって生きているという自覚
- 世界の苦しみや争いに対する自省と責任
- 地域で育まれた和解の智慧への尊重

私たちは、この文言がすべての宗教に共通する精神であると信じる。大会テーマは、すべてのものはつながっているという、いのちの一体性への認識にもとづき、他者の痛みに関心を向けることの自覚を促している。それは他国や他地域での紛争や争いを、傍観者ではなく、自分事として捉え、和解を導くための宗教者ならではの対話の促進が必要である。そして紛争を予防・転換するには、例えばハワイの「ホーポノポノ」¹ や熊本・水俣の「もやい直し」² 等、それぞれの地域に根差した共生と和解を促進する知見と手法を学び、その本質的な要素を抽出し、様々な和解活動に応用することを提言する。

「危険をおかしてまで武装するよりも、むしろ平和のために危険をおかすべき」

庭野日敬・WCRP 国際名誉議長 1978年「第1回国連軍縮特別総会」

- 信頼醸成こそが真の安全保障
- 人道主義に徹した非武装
- 軍縮なくして、開発なし

軍事による防衛は、相手に対する不信がもととなっている。軍事力を増長させることによって安心を得ようとするものであるが、その行き着いた先が、全人類を破滅に導く核兵器を生み出したのである。このメッセージは、相互不信をのり越えるには、自らが相手を信じることによって信頼を醸成することこそが、真の安全保障であることを示している。被爆者が中心となって訴えている人道的な観点からの核兵器廃絶や軍縮を加速させる必要があり、そのためにも核兵器禁止条約の早期の発効が望まれる。また、核廃絶や軍縮活動の分野と貧困撲滅、環境保護と連携させた総合的軍縮の視点を持ち、包括的な対話による啓発・提言を行うことが必要である。

「もったいない」³

- 人間が地球を支配しているという意識への自戒
- すべてのものは有り難し
- 包括的かつ個別的な環境リテラシーの醸成

人間だけでなく動植物をはじめすべてのいのちを大切にす「もったいない・かたじけない」という精神は、地球環境リテラシーの啓発において重要である。日本委員会は、デジタル地球儀を用いて雲の流れや風の動き、海面上昇や温暖化を可視化する包括的な学習と、トトロの森に隣接する1万㎡の土地で植樹し自然への愛着を深める個別的な活動による青少年向けの環境教育を実施している。それらの教育を通じて、地球環境に国境はなく、他国の人々とともに生きていること、すべての生きとし生けるものが宇宙船地球号の乗員であると感じることができる。地球は守るものではなく、地球に生かされていると認識し、すべてのいのちは一つであるという一体感を広めていくことを提言する。

-
1. アメリカ・ハワイで伝統的に伝わる対立を解決する方法。対立に関係するすべての人が集まり、話し合いでそれぞれの立場を理解し合い、対立を解決する。
 2. 「もやい直し」とは、恨みや痛みを直しながら、苦のとらえ直し、未来に向けた新しい価値観を生み出すための対話である。1950年代高度経済成長時に日本で発生した公害病である水俣病は、工場、行政、地域住民の間で重層的な加害者・被害者を生み、社会の分断やタブーをもたらしたが、「もやい直し」によって社会コミュニティの再形成を促進させた。
 3. 「もったい」とは「ものの本質」を意味し、「ものの本体はない」という意味で、仏教の「この世に何一つとして独立して存在しているものはない」という「空」の思想や「物事はすべてつながって存在している」という「縁起」の思想に通じる。

提言 15

① 他者と共に生きる未来

テーマにある Care は悲しみからくる心の叫びから始まり、対象に心を向けることで Care する人自身が、悲しみや痛みを克服し癒されると理解する。また「共通の未来」とは同じ価値観や考え方を持つ人々とのみ共有される未来ではなく、自己にとって受け入れがたい他者との共有される未来でもある。すべては、他者と自己は繋がっているという一体性を深く認識し、それ故、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という価値観が、私たちの未来において益々重要となってくる。これはすべての宗教に共通する価値観であると信じる。

② 霊性と感性に基いた人間性の寛容

現代社会では急速に科学技術が発展し、人工知能(AI)への依存度が高まっている。しかし、神仏を意識する人間の力や、大きな力に生かされているという謙虚な思いは AI では到達できない。霊性や感性の大切さを世界の人々へ広め、人間性を大事にした人間同士の直接的な対話がより一層必要になることを訴える。このことに関する宗教者の役割は非常に大きい。

③ ジェンダー主流化

軍縮、気候変動、難民問題、貧困、災害というすべての平和課題において、男性と女性に対して異なる影響をもたらしており、ジェンダーへの配慮は十分になされていない。このような課題において最も厳しい犠牲を強いられるのは女性である。あらゆる分野においてジェンダー平等を達成するために、ジェンダーの視点を踏まえた政策や計画、実施、評価のプロセスを行うジェンダー主流化が求められる。

④ いのちのつながりと最も弱い立場の人々の観点からの災害対応

日本委員会が東日本大震災の復興で掲げた3つの方針・視点「失われたいのちへの追悼と鎮魂」、「今を生きるいのちへの連帯」、「これからのいのちへの責任」という人類の過去、現在、未来の一貫性にもとづく観点は、物質的な復興だけでなく、被災者の心を精神的に支える活動となり、またコミュニティや社会、国レベルにおける復興の重要な指針となったと考える。自然災害などの有事からの復興において、この3点に根差した活動を意識することを提言する。さらに、災害や紛争が起こった時、社会的に最も弱い立場の人々が深刻な影響を受ける。平時から宗教間のネットワークづくりを行い、障がい者や外国人、子どもなど、特別な配慮が必要な人々や他宗教の方も受け入れられる宗教者であることが求められる。

⑤ 1宗教施設に1難民家族

紛争や災害で母国や故郷から離れざるをえなくなった難民、国内避難民への「受け入れ、保護、支援、共生」という4つの行動における宗教者の使命は大きい。政府や地方行政、市民社会、教育機関などと連携し、様々なコミュニティが協力して受け入れる体制をつくる。まず1宗教施設が1難民家族を受け入れることを提案する。

⑥ 地域独自の和解手法を世界へ

ハワイの「ホーポノポノ」や熊本・水俣の「もやい直し」等、それぞれの地域に根差した共生と和解を促進する知見と手法を学び、その本質的な要素を抽出し、様々な和解活動に応用する。それは政治的な和解を導くための、宗教者ならではの対話の促進のあり方でもある。例えば、紛争当事者でない第三者が、紛争地域の当事者同士を招き、紛争予防や和解を促進する。

⑦ 被爆・被災体験を次世代へ継承

広島・長崎における原爆の被爆者や福島原発事故による被災者、熊本水俣病の被害者、自然災害の被災者などが語る体験の証言は、これからの人類の幸福にとって何よりも得難い教訓である。こうした、一人ひとりの体験から導かれる教訓を大切にし、将来世代への継承をはかる必要がある。

⑧ 核廃絶の最大の壁である核抑止論の否定

軍事力による国家同士の牽制が核抑止論の本質であり、この核抑止論こそが核兵器廃絶の最大の壁となっている。危険をおかしてまで武装するよりも、むしろ平和のために危険をおかすべきという考えは、核抑止論をのり越えるものとして再認識される必要がある。また、核廃絶や軍縮活動の分野と貧困撲滅、環境保護と連携させた総合的な人間開発の視点を持ち、包括的な対話による啓発・提言を行うことが重要である。

⑨ 人道的観点からの核兵器廃絶

ヒバクシャ国際署名、北東アジア非核兵器地帯構想など、人道的な観点からの核兵器廃絶を加速させる必要がある。これらの活動から展望される核兵器禁止条約の早期の発効が求められる。

⑩ **SDGs 達成に向けた国際連帯税の実施**

6秒に1人の子どもが貧困や飢餓で亡くなる一方、世界では 0.14%の富裕層が、すべての金融資産の 81.3%を所有している。宗教者は、この不条理な現状を直視し、世界中の人々の尊厳が守られる中で生きるための働きかけを行う。SDGs 達成への責任を共有し、SDGs に必要な資金を確保するため、国際連帯税のより一層の実施を提言する。

⑪ **「もったいない」精神**

「もったいない」や「かたじけない」は、人間だけでなく動植物をはじめすべてのいのちを大切にする精神で、人間の食事は他のいのちを頂戴し、自らが生きる営みである。いのちを粗末に扱わない「もったいない・かたじけない」精神を広めていくことを訴える。

⑫ **Not 原子力 But 再生可能エネルギー**

WCRP 国際委員会をはじめとした国際宗教ネットワークは、2050 年までに再生可能エネルギーの使用率を 100 パーセントにすることを訴えた。CO₂ 排出量が突出している火力発電のみならず、人間が制御できない原子力エネルギーの使用の危険性への認識を深めるべきである。

⑬ **1人が1本の植樹**

国際社会が約束した COP21 でのパリ協定に基づき、温室効果ガス排出量実質ゼロを目指し、二酸化炭素を吸収する森林をつくるため、1人が1本の木を植樹する。また、自然環境に取り組む上で、森は森、海は海と別々に対処するのではなく、「森は海の恋人」と言われるように、自然界のつながりを意識して環境改善に取り組んでいく。

⑭ **地球に生かされている自覚**

日本委員会ではデジタル地球儀を用いて青少年向けの環境教育を実施している。雲の流れや風の動き、海面上昇や温暖化を可視化することで、地球環境に国境はなく、他国の人々とともに生きていること、すべての生きとし生けるものが宇宙船地球号の乗員であることを感じる地球環境リテラシーの啓発を推進する。このことで、地球というものは守るものではなく、地球に生かされているとの自覚が生まれてくる。また、海鳥や海洋生物のいのちを脅かすプラスチックゴミによる海洋汚染が深刻である。プラスチックゴミの排出をなくすよう働きかける。

⑮ **宗教に基く平和と和解の実践者の育成**

平和と和解をもたらすための人材育成は、急務である。将来世代が、宗教信条をもとにした和解や核兵器廃絶、地球環境保護、貧困撲滅、人道的支援などに積極的に取り組み、平和創造が果たすことができる教育と環境の確保が非常に重要である。



(公財)世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会

〒166-8531 東京都杉並区和田 2-7-1 普門メディアセンター3階

TEL:03-3384-2337 FAX:03-3383-7993 Eメール:info@wcrp.or.jp

ホームページ:<http://www.wcrp.or.jp/>